ニュージーランド滞在記

吉岡政昭

１，　　序　　（１）
２，学校編　　（１）～（６）
３，英語編　　（１）～（12）
４，出会い編　　（１）～（11）
５，国・気質編　　（１）～（15）

苫小牧民報掲載・・・・・２４編
追加　　・・・・・２１編

（序）私はロバ。

平成１６年の秋、退職を機に１年間の学生ビザを取得し、家内とニュージーランドのクライストチャーチに語学留学をした。

丁度この頃、テレビや新聞で「海外ロングステイ」のことが話題になっていた。そのせいか、ビザ取得の為の健康診断では、医者から「いまはやりのやつですね。」と言われた。しかし、この計画は退職の１０年以上も前からのものだった。（当時は夢に終わるだろうと思っていたが。）

語学学校入学が１１月１日と決まり、出発の前日、年賀欠礼の挨拶状を出したが、その中で次のように書いた。

> 外国のことわざに「ロバが旅をしたからといって馬になって帰ってくるわけじゃない」というのがあるそうです。
> 今さら語学学校に通ったところで言葉がわかるようになるという保証もなく、さりとて何者かになって帰って来られるわけでもありません。
> そうしたことを百も承知で行ってみることにしました。
> 私どもの子供時代には外国で暮らすことなど、夢物語に過ぎませんでした。いま、人生のたそがれどきにあって、精神的にも体力的にも多少余力のあるこの時期、いっ時であれ、夢を現実のものにしてみることにしました。

ＮＺに向かう飛行機の中で、何度か英語のアナウンスが入った。意味のわからないアナウンスを聞きながら、１年後、このアナウンスがわかるようになっていたらいいなあと思いながら聞いていた。このとき私は、自分がロバであることをすっかり忘れていたのだった。

学校編（1）

知らなかった「抜け道（？）」

　ニュージーランドに行くに当たっては、可能ならば少しでも長くいたいと考えていた。
　ニュージーランドはビザ無しで３か月間滞在可能となっていたため、「ビザを取らないとそれ以上の滞在は出来ない」と考えたのだ。その為、語学留学のための「学生ビザ」を取ることにしたのだ。
　留学の要綱に基づき、結核専門医と指定された健康診断書を作り、１年分の授業料（二人で２００万円）を納入して、学校の証明書を用意した。
言うなれば、「マニュアル通りの手続き」をしたわけだが、これが後日、私たちの「足かせ」となった。特に、授業料の事前納入が、私たちの動きを縛った。
例えば、通学を始めたあとで他に良い学校があると知ったときに、学校の変更は出来ない。変更の場合退学しても残り期間の授業料は返金されない。
違う地域に住んで、その地域の学校に通いたいと思っても、居住地を変更する事はできない。その学校に通学するためのビザだからだ。従って、北島に移ったりクイーンズタウンに住んだりすることは出来ない。また、同じ学校でも、午前中だけの授業に変更したり、通学期間を短縮することも出来なかった。もし、あえてそうすれば、残りの授業料が一切、戻らないからだ。当然と言えば当然だけれど、実際、現地に行ってみると、色々心が動くものなのだ。何も知らずに、少ない情報のもとで行くことになるので、現地に来てから入る情報の中で、心変わりが起こるものなのだ。しかし、語学学校の学生の中には、ワーホリでもなく、学生ビザでもなく、単に「ビザ無し滞在（観光）」なのに３か月を過ぎても帰国せず、長期間通学している人が結構いたのだ。不思議に思い聞いてみると「３か月の終わり近くになったらオーストラリアに２，３日行って、それからＮＺに再入国するとまた新たに３か月滞在できる」とのことだった。この話を聞いてびっくり。どこにでも「抜け道（？）」ってあるもんだと妙に「感心」したものだが、こんな程度のことは「抜け道」なんて言わないのかも知れない。しかし、それならそうと、「他国に１日でも出国し、再入国すれば、また、新たに３か月滞在可能」と但し書きを書いておけばいいのにと思った次第だ。

学校編（２）

おもしろい校則

　クライストチャーチ空港に到着して新しい「すみか」までの道のり。至る所で八重桜が満開になっていた。　出発の時は、初雪のことが話題になっていたので、赤道を越え南半球に来たことを実感した。
　１１時間のフライトだった。
　語学学校入学までの１週間、新生活の準備をした。　入校初日、クラス編成のための学力検査（筆記と面接）があったが、検査場には日本人を含むアジア人が約２０名くらいいた。
　筆記の時、会場が食堂だったせいか、休み時間に他の学生がぞろぞろ入ってきて、飲み物を飲んだりおしゃべりなどしていたので何かと落ちつかなかった。
　面接では名前と年齢と退職前の職業は答えられたが、それ以外は何を聞かれているのかさっぱりわからなかった。
　学力検査終了後、担当の女性が来て学校生活の心得や校則など書かれている冊子を渡し説明を始めた。「参ったなあ」と思った。
全くのちんぷんかんぷんだったからだ。
　帰宅後、辞書を片手に冊子を読んでみたところ、「宿題は授業の前に終わらせなさい。」「もし５分以上遅刻したら勉強を中断させることになるので授業に参加させず欠席扱いとします。」等々あった。
しかし、実際には宿題の点検もなかったし、何分遅刻しても、とがめられることはなく出席扱いとされていた。ニュージーランドも「建て前と本音の国」なのかなと思った。また、ほかにおもしろい校則があった。
「鼻をすするな」「鼻をほじるな」と書かれていた。「授業中に鼻をすすることは他の人を大変いらいらさせる。」「学校ではつばを吐いたり鼻をほじったりしないで下さい。」
　授業中、時々わたしは、鼻をすすり、鼻をほじってみたが、特に注意をされることはなく普通に授業を受けることが出来た。

学校編（３）

授業・・・

　語学学校での授業はもちろん英語で行われた。
私たち夫婦は､エレメンタリークラス（初級者の部類）だったせいか、授業内容は三単現のｓから始まって、日本の中学校で習った文法の授業が中心だった。だから、プリントや板書された文字を見ると、英語の説明が十分理解できなくとも、何を説明しているのか理解できた。
ただ、授業のスタートの時、教師の指示が理解できず､「何をすればいいのか」を、周りの人の動きを見ながら判断しなければならなかった。従って、いつもワンテンポ、ツウテンポ遅れての授業参加だった。
　競馬のレースの時、ゲートが開いても一匹だけ走り出さずに、ゲートに残っている馬のようなものだった。
因みに、家内と同じクラスになったが、家内の方が私よりも聞き取れていたので､「何をすればいいんだ？」と聞きながら授業に参加した。学力は私の方が上だと思っていたので、ちょっと、しゃくに感じた。
　学校には日本人の外に､東南アジアからの学生が多数いて､韓国､台湾、中国・香港、（中国と区別していた。）タイ、ベトナム、インドネシアなどから来ていた。
他には、少数だったが、ロシヤ、ウクライナ、ドイツ、バングラディシュ、モロッコ、アフガニスタンなどから来ていた。これらの国の中で日本語や日本に強い関心と親しみを見せていたのが、韓国人と台湾人だった。

学校編（４）
「つらい」が誤解された。

語学学校では毎日日記の提出を求められた。通学して３週間目、相変わらず先生の言っていることがわからず、ある時、日記に「先生の英語が聞こえないのでつらい」と書いた。日本人同士での会話で「英語が聞こえなくてつらいねえ。」なんて軽く言っていたことをそのまま書いたつもりだった。当時はいずれ聞き取れるようになると思っていたし、（実際は、そうならなかったのだが）毎日が楽しくて仕方なかったのだった。だから、少しもつらくなかったのだ。しかし、文章になったこの一節は、掛け値なしに受け取られ誤解されたことが後日わかった。日記が返された時、先生は I'm　sorry と言って何やら話した後で、前の席に座るよう言った。その時は言われるままに前の席に移ったが、ただ、「つらい」と書いたことが誤解されたのかなと思った。私は英語が「聞こえない」（聞き取れない・理解できない）ということを I can't hear・・・と書いたのだ。

そんなことがあって数日後。買いもの帰りにバス停にいた小さな女の子と若い母親に話しかけた。母親が何やら言ったので、I　can't hear you と言うと母親から Are you deaf？と聞かれた。「耳が不自由なのか」と聞かれたのだ。そのとき初めて、先生が I'm　sorry と言って前に座るよう勧めた意味がわかった。日記には hear ではなく understand を使うべきだったのだ。また、「つらい」という単語も bitter を使ったことも問題だった。bitter は「拷問されたときのようなひどいつらさ」を意味していることを後日知った。

つまり日記には「耳が不自由なので先生の言っていることが聞こえず拷問されるくらいつらい。」という意味のことを書いてしまったようなのだ。そして何よりも、問題だったのは、（このことは、かなり後になって気づいたのだが、）私は、言いたい英語がわからないとき、電子辞書で日本語を調べ、そこに出てくる様々な英語の中から、適当に英語を選び、当てはめて文章にしていたことだ。日本語にすれば、同じ『つらい』でも、英語になった一つ一つの単語が、どんなときに使われるのか、そのことの吟味が必要だったということだ。その点では、英英辞典を使うのが望ましいのだが、そうするとまたわからない単語が出てきて、また、英英辞典となると、際限ないので、そういうわけにはいかないが、せめて、電子辞書に出てきた『同じ意味』とされた英単語の例文を確かめて、自分が伝えたい文章にどの単語が近いかを調べる必要があるということだったのだ。

学校編（５）
日本では､滅多に見られない「いい加減な教師」たち

語学学校では、少々、心落ち着かないことがあった。
ゴミを黒板の位置から後ろのゴミ箱まで放り投げたり、学生と一緒に乗ったバスの窓からバナナの皮を捨てたりする若い女教師がいた。
　これは行儀が悪いで済む話なのだが、想定外だったのは、試験の時、監督がつかずカンニングが黙認されていたことだ。
　その事実を知らされた高慢ちきな主任教師は「大人のすることだから」と言うだけで自分も試験監督を最後までせず途中で抜け出したりしていた。採点も生徒同士にやらせる教師も何人かいた。因みに、この主任教師もその１人だった。
　授業の時は教科書のコピーがその都度、全員に渡されていたのだが、教師の中にはコピーをくれず１冊の教科書を２人で（ある時は３人で）使わせる教師もいた。
　教科書またはコピーを全員に渡して欲しいと要求された主任教師は「なぜ？」と言って不快な顔をした。その日は不便をしながら彼の授業を受けた。
留学先の学校には、こうした学校もあるということだ。

学校編（６）
南極大陸遊覧飛行事故・・

　一方、少数だったけれど試験監督を最後まで行い採点も自分でする教師もいた。また誠実を絵に描いたような教師との出会いも忘れられない。その教師はとても親切な人で何気ない会話でもあとで必ず資料を持参し説明してくれた。頂いた資料の中には南極大陸の遊覧飛行事故（１９７９・１１・２８）の新聞があった。
　実は私たち夫婦の計画の中に、もし、南極大陸の遊覧飛行が手の届く範囲の料金であれば乗ってみたいというのがあった。
　しかし、それは墜落事故によってすでに中止になっていた。
　遊覧飛行の計画を聞いたその教師が、数日後、事故の記事が載った新聞を持ってきてくれたのだった。
　その事故では乗客・乗員全員（２５７人）が死亡し、うち２４名は日本人だった。新聞には犠牲者全員の名簿が掲載されていた。
　その中には登山家、今井通子さんのご両親がいて、その名前を確認することが出来た。
因みに来年の１１月２８日は事故から数えてちょうど３５年になる。

英語編（１）

驚かしてしまった。

ニュージーランドで日本語の特徴を再認識することがあった。
一つは主語の問題だった。
私は先生の説明に対し「わかった。」と答える時、決まって understand と言っていた。この間違いを指摘してくれたのが個人レッスンの先生だった。
この頃、会話の練習の為、学校とは別に個人レッスンを受けていた。
先生は私が understand と言う度に I understand と言い直してくれた。私は「わかった」ということをそのまま英単語に置き換えていたのだ。動詞が前に来たら命令形になることが頭から抜け落ちていた。だから「わかった」と言ったつもりが「わかれ！」「理解しろ」と命令していたのだ。
このこと以外にも、自分でも信じられない間違いを繰り返していた。
過去を現在形で言ったり、Do he.・・とか、Does you・・・など、まさかと思う言葉が口から勝手に飛び出した。口は大脳を無視していたのだ。
加えて語彙不足もあり散々だった。だから「俺はバカだ」と何度頭をバンバンしたかわからない。
その時、改めて気づいた事があった。
映画のラブシーンで「愛している」と言う時、必ず「Ｉ」が入っていた。Love とだけ言って誰が誰を love するのか、わからない会話は存在しない。二人しかいない場面でも必ず「I」が入っていた。
日本語なら「好きだ」と言うだけで、誰が誰を好きなのかわかるが、英語の場合、基本的に主語を必要とする文章構造になっていたのだ。
次の話はオークランド空港でのこと。椅子に座っていた婦人が立ち上がったとき手袋を落としたのだ。
それに気づいた私が発した言葉が「Drop ！ Drop !」だった。直接手渡したので意味は通じたと思うが、「落ちました」と言ったつもりが、「伏せろ。伏せろ！」と言っていたのだ。
彼女は何が飛んできたのかとびっくりしたに違いない。

英語編（２）

謝罪しているのは誰？

帰国後、広島方面を旅行し原爆死没者慰霊碑を訪れた。慰霊碑の碑文には「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」とあった。

この文を読んで改めてニュージランドでの understand 問題と碑文の主語論争を思い出した。

「過ちを繰り返しませぬ」と謝罪している主語は誰なのか？原爆を投下した米国なのか。戦争を始めた日本なのか。

英訳の主語を確かめて見た。主語は We となっていた。We ？ We って誰のこと？再び主語の曖昧さを感じた。この英訳は日本人によるものだった。日本人ってトコトン主語をはっきりさせたがらない国民なのかと思った。様々な批判の中で主語を「世界人類」とする広島市長見解が出た。

果たしてこれで主語が明確になったかのか。

私たち夫婦がニュージーランドにいた時期（２００５年７月）、「碑文には米国への抗議が込められていない」として『過ち』の部分に傷をつける事件あった。

まさに主語が曖昧な日本語によってもたらされた事件だった。

現在、核兵器保有国は米国だけはない。核兵器廃絶は「世界人類」共通の課題だ。そう考え、未来軸をおいてみると主語はやはり「世界人類」なのかも知れない。

因みに原爆ドームの世界遺産への登録に米国が反対し中国が棄権した。

先日、米中戦略経済対話が開かれ互いの代表が挨拶をした。米国の首脳は孟子や孔子の言葉を引いて米中の関係強化を訴えた。

中国代表は演説の最後に力を込め、「Yes, we can.」と言った。
これは　オバマ大統領が選挙のキャッチフレーズに使った有名なフレーズだった。
その時、私には can が、かなりはっきり「カン」（con ペテンにかける）と聞こえたのだ。（ネイティブにはどう聞こえたのだろうか。）

We とは中国と米国のことで、ペテンにかけられるのは「世界人類」ってことか？　「まさか」。

英語編（３）

複数形も曖昧な日本語

「主語」の話とは別に日本語の特徴を再認識することとなった。
個人レッスンの時、何度も注意されたもの中に、「複数形」のことがあった。私の話す英語が、すべて、単数であり、複数形が使われていないことに対する指摘だった。必ず、「ス」「ズ」「イズ」などと指摘された。そのとき、改めて気づいた。日本語は「複数形」が未発達（？）な言語ではないかと思ったのだ。

考えてみると、日本語は、物に複数形をつけて表すことが少なく、あっても、皆、人間に関してだけではないかと思った。友だち、子供たち、大人たちなどだ。しかし、机、椅子、リンゴ・・等々には、複数形は、使わない。つまり、そうした日本語の特徴のために、私も含め、初心者の日本人が話す英語は、複数形をほとんど意識せず、単数形で言ってしまっているのではないかと思った。しかし、話すときはそうでも、書く時は別で、ゆっくり考え区別出来るせいか、あまり間違わないのではないかとも思った。

同様に冠詞もそうだと思う。the、a(an)は、よく飛ばした。今では、「それでもいいや」と、開き直っている。それでも意味が十分通じるからだ。一方、前置詞は、ほとんど間違って使っていたと思うけれど付けることが多かったのではないかと思う。それは、日本語には助詞があり、前置詞と似た用法を持っているからだろうと思う。

ある時、個人レッスンの先生に「ネイティブは、複数形と単数の区別や冠詞や前置詞をどのようにして間違わずに話すようになるのか」と聞いたことがあった。すると「どのネイティヴも子供の頃は、よく言い間違って親や先生から注意をされた。その中で自然に身についていく」と答えてくれた。

英語編（４）

言い間違えて笑われた。

　ある朝、近所で行われたガレージセール（個人の車庫で色々なものを販売）でのこと。
お客の中に赤ん坊を抱いた男性がいた。家内が「How months ?」と聞くと男性は急に赤ん坊を抱きしめ、笑いながら「赤ちゃんは売りません」と言った。そもそも、間違った英語のせいもあってか、その男性は「How much ?」（いくらですか？）と聞き間違えたふりをして、からかったのだった。そう言った後、「４か月」と教えてくれた。
　日本では赤ん坊の年齢を聞く時は「何カ月？」と聞くが、英語では大人と同じように「何歳？」と聞くのが普通だそうだ。「何カ月か」を知りたい時は「How many months・・・ ？」と聞くべきだったのだ。
　次の話は家内の日本での英会話教室でのこと。
　先生にお子さんが生まれると知ったとき「Do you know which your baby is ？」と尋ねると先生は爆笑して「Of course my baby !」（もちろん、わたしの子です。）と答えたのだそうだ。「男か女か知っているのか」と聞いたつもりが、「誰の子か知っているのか？」と誤解されたようなのだ。この場合は「・・・which gender?」とか「・・・which it is ?」と聞くと良いそうだ。
　帰国後、韓国を旅行した時のこと。ツアーガイドから日本語を勉強していた時の話を聞いた。
　日本の店で「イチゴ下さい」と言うところを「イノチ（命）下さい」と言って笑われたという話。
　外国人が間違った日本語を使って笑われた事例をトム・ディランという人が書いている。
　ある時、家主の所に「オシリ（お尻？）がしまりません。」という訴えがあった。意味がわからず駆けつけてみると「オシイレ（押入れ）が閉まらなかった」という話だった。
言い間違いもちょっと楽しい学習法かもしれない。

英語編（５）

「ウソ英語」でも、十分、通じるのです。

　ある時、５０代のウクライナの女性が私たちのクラスに入った。彼女はニュージーランドに移民にしていた。ＮＺ政府は多数の移民に対し語学学校への通学を義務づけ、英語習得のために経済援助をしていた。　その女性は、入学のその日、授業が始まるや否や、教師と何やらぺらぺら会話を交わし始めた。
印象的には、英会話が非常に堪能に見え、学校通学の必要性を全く感じさせないほどに見えた。
　しかし、間もなくしてすぐ、その女性の総合的な英語のレベルがわかった。まず彼女は、単語はほとんど書けなかったし文法もほとんどわかっていなかったのだ。
練習問題を解く時は、必ず、隣の人のプリントを見た。その為、クラスメイトからとても嫌われていた。テストの時ですら平気で隣の人の答案を見ていた。
ある授業の時、先生は彼女の言った内容をそのまま白板に書いた。きっと修正するためだったと思う。
私は文章を読んで驚いた。その英文は文法はもちろん、とにかく「変な文章」だったのだ。
　私は恐る恐る「この文章は正しいのか？」と聞いた。先生は首を横に振った。しかし、先生はこのウクライナの女性が何を伝えたかったのか、それについては、十分、理解しているようだった。
一方、彼女もネイティブが言っていることを、たぶん、かなり理解できているように見えた。「変な英語」であっても、積極的なコミニュケーションによって、自分の考えを相手に伝え、意思疎通が図られていたのだった。
この事件（？）は、会話の意味を考える上で、また、会話に対する積極性を培う上で示唆に富んだ体験となった。

英語編（６）

「でたらめ英会話」でも、恥ずかしくない！

このウクライナの女性との出会いは、私の意識に大きな変化をもたらした。「会話の意味」を「へんてこりんな英語」を物怖じせずに話す彼女の姿勢から学んだのだ。
「行った。楽しい。京都。私。昨日。友達３人」と、もし、こんな日本語で外人が話かけてきたらどうだろう。肝心なのは、その外国人が何を伝えたいのかということになるのだが、その点は間違いなく理解できるはずだ。そして、その「ヘンな日本語」を話す外国人を笑ったりバカにしたりする日本人は一人もいないということだ。それは、どの国にいても全く同じ事が言えるのだ。
この単純な事実を、ウクライナ人の女性によって気付かされた。要は、お互いの考えと意思を「言葉」でキャッチボールが出来るか否かということだ。
帰国後、私はいつの間にか、積極的に外国人に話しかけられるようになっていた。ニュージーランドに行く前と比べれば、雲泥の差。まさしく人間が変わったのだ。
　旅行先での外国人との会話は、所詮、簡単な「会話」でしかないのだが、それでもそれが旅行の楽しみとなったのだから大変なものだ。聞く能力がかなり低いので、会話の内容を深めることには、限界があるけれど、ほんの数分間でも、外国人との会話が出来るようになったということは、私の中で「意識の大変革」が行われた証拠なのだ。ただ、外国人に話しかけている私も、さすがに、いい加減な英語に言い訳がしたくなる時がある。そんな時、必ず、Better strange English than never（変な英語でも、しゃべらないよりは良い）と言うことにしている。
これは、Better late than never（遅くとも、やらないよりはまし）という「ことわざ」をもじって言ったものだ。これを聞いた外国人は、まさしく異口同音に、何度もうなずきながら「Yes、That's right」（その通りだよ）と言ってくれるのだ。この時の「yes」は、「イエース」と力を入れて言うのだ。
あるとき、小樽で会ったアメリカ人が言った。「一週間、日本を旅行していたが、初めて日本人に話しかけられた」と。「そうだよな。日本人って」と思った。本当は、話しかけたいと思っているのに、「恥をかくことを避けて、じっと、我慢して知らん振りしているんだ」と思った。特に中年以降の人は。「恥の意識」と「羞恥心」が混在しているのだろうと思った。

英語編（７）

「読み書き」は「あとで」は、だめですか？

　ニュージーランドで思ったことは、日本で子供に英語を勉強させる時は、まず、発音と意味だけ教える期間を十分とったらいいのではないかと思った。　単語のスペルは敢えて教えず、筆記試験もしない。文法も教えない。ノートをとらせるのは、聞き取った意味と聞こえたとおりの発音を単に記録のためにメモ（カタカナでよい）するだけにして、耳をだけを頼りに発音し会話を交わす。こうした耳中心の訓練を先行させるのが大事ではないかと思った。
　ＮＺに行って間もなく、売店で働いていたＮＺ人の若者と知りあった。彼は日本語がそれなりに話せたのだ。感心したのは、『日本語を話せるのか』と聞いたときに、『少しですけど』と答えたことだ。「少しだけ」を言う人は多い。しかし、『(すこし）ですけど』と答えられる外国人は、そう沢山いるとは思えなかったからだ。
彼の日本語はたった１年間、専門学校で勉強しただけで「聞く話す」が出来ていたのだ。ただ、読み書きはあまり出来ないそうだ。
　日本人の大多数が中学校・高校と最低６年間英語を習っているのに、「話せない、聞けない」『新聞を読めない』の状態は情けないと思った。これは、最近の若者には当てはまらず、私たち世代の話だけなのかも知れないが、それにしても、たった一年間、日本語を学んだ彼と比較すると日本人との会話力の違いには、雲泥の差があった。そんなショックの中、ＮＺで思い出したことがあった。５５年も前の中学校の国語の教科書に出ていた話だ。
アイヌ語研究で有名な金田一京助が、初めてアイヌ部落に入った時の話だ。アイヌの研究をしていた金田一は、アイヌ語を覚えるために一計を案じた。　彼は子供の集まっているところに行き地面にぐちゃぐちゃな線をぐるぐると描いた。すると集まったアイヌの子供達が、「○○・・」とお互いに言ったそうだ。彼はこの「○○・・」が、「なに？」という意味だと思い、木や花を指さし「○○・・」と言うとアイヌの子供達が、それぞれ「○×」や「××」と答えたそうだ。そのようにして彼は、色々なアイヌ語を覚え記録していったというのだ。金田一京助もアイヌ語をまず、耳で覚え、覚えたアイヌ語を一生懸命に使って物にしていったのだと思った。
当時、アイヌ語の辞典はもちろんなく、そもそも、アイヌ語には文字がなく、口承によって、アイヌ文化が伝えられていたのだ。金田一は、まさに、耳と口でアイヌ語を会得したのだ。その言語学習の基本形を英語学習にもっと活用したら良いのではと思ったのだ。

英語編（８）

「カラスなぜ鳴くの？」・・・「すばらしいですね」と。

　ニュージーランドに行ってから半年くらい経って、週２回、個人レッスンを受けた。二人目の個人レッスンの先生は、学校とは関係のないアメリカ人だった。
英語が聞き取れない私は、せめて自分の伝えたいことが言えるようになりたいと思って始めたのだ。
　個人レッスンは、おしゃべりの中で「間違い英語」を指導してもらうことだった。
　話の内容はユーモラスな小話や私が関心を持っている話を一方的に話すことだった。
　彼は私が話すたびに「You mean ？」（つまり、あなたの言いたいことは・・）と、まず言ってから間違った英語を直してくれた。
　ユーモラスな小話の時、彼は「ニヤッ」と笑ったし、関心のある話しに、それなりの反応があった。
ここでも、いい加減な英語が通じていたのだ。
ある時、彼にこんな話しをした。

「日本には野口雨情という詩人が書いた『七つの子』という詩があます。
詩の内容は『カラスなぜ鳴くの。カラスは山にかわいい七つの子があるからよ。
かわいい、かわいいとカラスは鳴くの。かわいい、かわいいと鳴くんだよ。』

私は直訳を試みたあと、次の言葉を付け加えた。

カラスの鳴き声は汚い声です。しかも、カラスの子がそばにいる時は、特に攻撃的でうるさくて汚い声です。
しかし、野口雨情には、その汚いうるさい鳴き声が「子供が、かわいい、かわいい」と聞こえたのです。そしてそれを詩に書いたのです。」
　私の話終わると彼は「Oh！Great！」（素晴らしい詩ですね）と言ってから、何やら話をして「You　mean・・・」と言って、私の英語の間違いを直してくれた。
　雨情の詩を「素晴らしい」と言ってもらったことが、とてもうれしく、ＮＺの思い出になった。

英語編（９）

ええーツ？！　そうだったんだ！
俺、学校で習ったっけ？

会話を始めてみると筆記では絶対に間違うことのない信じられない間違いを何度も口にした。
「俺、そんなこと完璧に知ってるんだよな」って、心の中で悔しがるような基礎的な間違いを繰り返し、何度、自分をバンバンしたかわからない。
しかし、他方、本当に基本的なことで知らなかったのだと改めて教えられた「英語」（文法）もあった。
ニュージーランドに行った頃、「どこに住んでいるの？」とよく聞かれた。私は何の迷いもなく I live in Christcharch.と答えていた。ある時、個人レッスンの先生から「その言い方は間違っている」と指摘された。あなたは一時的にクライストチャーチに住んでいるのだから、I am living in Christcharch が正しいのだと。「I live in Christcharch.」は、これから先もずーとクライストチャーチに住む場合に使うのだと教えられた。つまり temporary（一時的）な場合は、進行形を使うと言うのだ。「ええー！そんなこと習ったけ？」って思った。改めて、日本語の文法書で確認してみたら、確かに、「一時的」との説明もあった。しかし、それでもなお、「習った」という記憶と結びつかない。それで、一緒にいた日本人に、「習った？」「習った？｝と次々聞いたけど、皆が皆「習っていない」と答えた。どうも日本から来ていた学生達は、私同様、英語が不得意だったのかなと思った。進行形と同じように再認識した言葉（文法）があった。must と have　to　の違いだ。私の頭には、どちらも「ねばならない」という意味しか浮かんで来ず、どちらも基本は同じ意味だと思っていた。ＮＺの授業で教わったのは、「must」は personal feeling（個人的感覚）で使うけれど「have to」は、impersonal（個人に関係ない）な時に使うのだということだった。驚いた私は、さっそく、若い日本人の学生に聞いてみた。「ええ？そうなんですか。私は have to の方が強いんだとだけ思ってました」と言う。どうも、この学校に来ている日本人の英語の学力は、やっぱり、私と同じで、ぱっとしない人達が多いのかなと思った。ところが、これを習った翌日、偶然にも、校外学習でリトルトンに行った帰りのバスでのこと。隣の席に座っていた教師が、窓の外の喫茶店を指さして、「とっても良いところだ。」と言ったあとで、you must go there と言ったのだ。「是非､行ったらいいよ」と行ったのだ。この時、女房と顔を見合わせて言った。「早速、出たね」

英語編（10）

誤解したのに、正解を答えちゃった！

ある時、学校経営者の一人から「What's Devi's class like?」（デヴィの授業はどう？）と聞かれた。（多分こう言ったと思うのです。）私はそれを聞いたとき「like」と「ディヴィ」だけが頭に入り「ディヴィを好きか？」と聞かれたと思ったのだ。それで、はっきり言うのもはばかられて、「so　so」（まあまあ）と答えた。そして「授業はいつも板書とプリントだけだから、もっと会話をして欲しい」と付け加えた。ところが、翌日、デヴィは授業担当からはずされたのだ。只只、びっくりした。もちろん、私の発言のせいなのかどうかはわからない。ただ、授業から外された直後、廊下で目を赤くして他の教師と話しているデヴィを見た。

もしあの時、彼の言った「What's Devi's class like?」を正しく理解できとしても、答えはやはり「so-so」だったから、結果的には、聞き間違っていたのに会話が成り立っていたのだ。似たようなことが家内にもあった。　ある時、同じクラスで年齢も近い韓国女性から、「You are smart.」と言われたことがあった。ずんぐりむっくりの家内は「体型がスマートですね」と言われたと思い、あわてて「ＮＯ！ＮＯ！」と答えたと言う。いくらお世辞にしても、ほどがあると思ったのだと思う。しかし、「smart」とは「利口」とか「賢い」という意味だったのだ。もし、その時、家内が「smart」を正しく理解していたとしても、事実に基づき、当然「ＮＯ！ＮＯ！」と答えたはずだから、ここでも会話が成り立っていた事ということになったのだ。

どっちにしても、大した問題にならない「勘違い」だったので、事なきを得ているが、もしこれが、重大な問題での聞き違いであれば、誤解のもとになったはずだ。

英語編（11）

若い人、耳の良い人は上達が早い・・だからこそ。

　ニュージーランドで一人の高校生と知りあった。彼は日本の高校を退学になりＮＺに来ていた。彼がＮＺに来た当時は、英語は全く話せず語学学校は最も低いクラスから始まったとのこと。しかし、私達が出会った時の彼は何不自由なく（そのように見えました。）英語を話し現地の高校に通っていた。
彼は「言葉は勉強じゃない」という言い方をしていたが、これは、彼にとっての英会話の習得が、改まった「勉強」というよりも、「生活」の中で覚えたものの方が多かった故の言葉と思った。
　私たちが通った語学学校には、ジュニアクラス（中学生以下）があった。そこに通っている東南アジアの少年少女達は、１年経たないうちに、日常会話を普通に話せるようになるとのこと。子どもは何をするにも未来がありうらやましく思った。
　ＮＨＫの番組に「英語でしゃべらナイト」というのがあった。
ゲストに出てくる多くの人は、まず、若いこと。それにいかにも耳が良さそうな人達。俳優やアーチストと呼ばれる音楽関係の人達。彼らは特に英会話の吸収が良いように感じた。やはり、音で表現する仕事をしている人達は違う。耳が良く上達が特別早いように思った。それから外国を転戦しているスポーツ選手も同様だった。時には、それがイタリア語であったりする、そんな彼らを見ていると、外国語の会話を学ぶなら、とにかく若いうちに、外国に行って実践を重ねるのに勝るものはないと思った。しかし、他方では、外国に行かなくとも、かなりの会話力を付けている人を知っている。日本国内で英語（会話）を学ぶとしても、その点、今の日本は実に恵まれた環境にある。ラジオ、テレビの英会話番組。英検や TOEIC その他の検定試験の普及。高校、大学でのリスニングの試験導入。おまけに、学校におけるＡＬＴの存在は大きい。直接、「外国人」との交流を可能にしているからだ。我々世代のように「外国人」が珍しく交流体験が皆無な世代とは違う。聴覚のしっかりした頭の柔らかい若いうちに、こうした恵まれた環境を生かしつつ、ワーホリなどを利用して外国に住んでみたらいいと思う。

英語編（12）

「よろしくお願いします」も、
欧米人から見ると、「異文化」なのではないか？

初対面のニュージーランド人と囲碁を打つことになった。私は「よろしくお願いします」と言おうとしたが、言い方がわからない。そばにいた日本人（移民）に聞いたところ、「その言葉は英語にはないようですね」とのこと。なるほど Nice to meet you. や How do you do.じゃないし、後日、辞書で調べてみたが、適当な英文が見つからない。確かに「ないようだ」と思った。そこで改めて考えてみた。私たち日本人が「よろしくお願いします」と言うとき、どんな気持ちでこれを言うのか。まず、長い時間の付き合いを予定していることが多い。次に、今後の己の不始末や不行き届きに対する事前のお詫びの気持ち。様々なご教授のお願いする気持ち。そんな諸々の気持ちが『よろしくお願いします』のベースにあるのではないかと思った。

しばらくして、語学学校で知り合った台湾の青年に「知らない同士が初めて会った時、日本では『よろしくお願いします』と言うが、中国語では何というのか」と聞いた。彼は私の質問に「チンドウジュジャ」と答えた。

その青年は、たまたま「よろしくお願いします」という日本語を知っていたので、話の理解が早かった。「漢字でどう書くのか」と聞くと彼は「請多指教」と書いた。字を見て驚いた。漢字の意味が日本語の「よろしくお願いします」とほとんど同じ意味だと思ったからだ。「多くの指導と教えを請う」と漢字は言っていた。ただ、私の「チンドウジュジャ」の発音が、かなり違っていたらしく、帰国してから会った台湾、香港からの旅行者には、すぐには通じず、何度も聞き返された。仕方なく、漢字を書いて伝えたこともあった。すると、「ああ」と言って、イントネーションの違う「チンドウジュジャ」を言うのだった。

因みに、中国語は（タイ語もそのようですが）四声と言われる発音のため、カタカナだけで覚えても伝わらないようなのだ。日本語でも「橋」と「箸」がアクセントによって意味が違うように、カタカナでは同じでも、発音の仕方が四通りあって、それぞれ意味も漢字も違っていた。台湾人の学生から、「マー」という発音を 4 通り言ってもらって、意味の違いを教えてもらったが、馬と母が記憶にあるだけで、あとの２つは、頭には入らなかった。中国語は難しいとう印象で終わってしまった。

出会い編（１）
政治をめぐる生々しい感情を見た。

二人目の個人レッスンの先生（アメリカ人）の待合室に東アジアの地図がはってあった。見ると竹島に小さな韓国の国旗が立っていた。誰かのいたずらと思い、はずして日の丸を立てた所、翌週、また、同じように韓国旗が立っていた。試しに再びはずして、日の丸を立ててみると翌週もまた同じ事が起こった。おそらく韓国人の学生がやっているのだろうと思った。まさか、ニュージーランドで竹島問題に出食わすとは思わなかった。
そもそもこの頃の私は、『竹島』が政治問題化しているという認識はなく（完全な政治ぼけで）、従って、この問題に関する知識も皆無だった。ただ、日本の島と思っているところに韓国の旗が立っていることに違和感を覚え、日の丸を立てたに過ぎなかった。
　いろいろな国の人間が集まると、政治問題が単なるニュースではなく生々しい感情を伴って伝わって来る。
ある時、学校で自国をアッピールする企画（国際フェスティバル）があった。その時、会場に掲示されていた万国旗の中に台湾の国旗がなかった。台湾の学生たちは「台湾の旗がない」と口々に訴えていた。確かに台湾は民主的な選挙によって成立している独立国家なのだ。中国は認めたがらないが、現実には全く別な国家が存在しているのだ。授業の時、「人間の将来は楽観的か、悲観的か」と一人一人に意見が求められた。その時、数名いた台湾の青年達は異口同音に「悲観的だ」と答えた。理由は「将来、中国に統一されるから」と言った。
また、別の場面だったが、香港から来ていた女子留学生が、「１９９７年（香港が中国に返還）には、みんなで泣いた」と言っていた。「自由は大丈夫か」との私の質問に「まだ大丈夫」と答えた。比較的最近のこと。インターネットのグーグルが中国政府の検閲を拒否して香港に撤退した。しかし、その香港でも天安門事件・チベット暴動は検索出来ないという。香港の民主主義は確実に後退していると思った。
　ウクライナから移民した５０代の婦人が言った。学校や公式の場所ではロシア語を使ったが、日常的にはウクライナ語を使っていた。ウクライナの独立が決まった時、嬉しくて「バイバイ、ロシア」と言ったという。その時、彼女は右の手のひらを胸元から前へ、うちわをあおぐように「バイバイ」を繰り返した。その手にはウクライナ国民の長期の苦難と屈辱の思いがこもっていると思った。
外国では、政治問題は生々しい感情に彩られているのだ。

出会い編（２）
「ジャパン」「南京」・・・・

語学学校に入学してまもなく日記の添削が始まった。
そんなある日、「今日は真珠湾攻撃の日だね」と家内が言った。
家内はよく「今日は〇〇の日だね。」と言う。
結婚記念日、誕生日、飛行機の墜落、災害、命日（犬も）など様々だ。
家内とのそんな会話もありその日は真珠湾攻撃について書いた。
日本が真珠湾を攻撃し戦争を始めたこと。アジア諸国を侵略し大変な被害を与えたこと。日本は再び同じ過ちを繰り返さないと書いた。
ニュージーランドに来て２か月。アジア諸国の青年達と毎日を過ごしていた。そんな中、「自分の親世代がこの人たちの国を侵略し、あるいは植民地にしたのだ」との思いが湧き上がっていた。
その日の日記は、彼らの顔を思い浮かべながら書いた。
それから数日後、ちょっとしたトラブルがあった。「今の中国は自由に外国に出られるんだね。」との何気ない私の言葉に、インドネシアのサルという名の青年が噛みついた。
彼は「ジャパン」「南京」と言って右手で腹を切り裂く真似をした。直感的に南京事件のことを言っているのだとわかった。
「日本は多くのアジアの国を侵略した。I'm　sorry」との私の言葉でその場は一応収まった。
実はこの問題が起こる約１か月前、友人の日本人の女子留学生が同じホームステイの中国人から「日本の若者は日本が中国を侵略したことを知らない。」と非難され泣かされている。どうしたらいいか。と相談されたことがあった。
中国政府による反日教育のせいもあるだろう。しかし、日本の学校では日本のアジア侵略をしっかり教えていないことも事実だと思った。そのことがアジアの青年達との間にギャップを生んでいるのではないかと思った。
小泉元首相は在任中、靖国問題絡みで韓国や中国に対し「未来志向で行こう」と何度も言っていた。
しかし、本来この言葉は、被害者側が言う言葉ではないかと思って聞いていた。役者がセリフを間違ったと思った。

出会い編（３）

(38)ヒロシマ、ナガサキ。I'm　sorry 。

語学学校の夏休み（１月)。ニュージーランドの南島にあるミルフォード・サウンド（世界自然遺産）を訪れその帰りマウントクックに宿泊した。そこは秀峰マウントクックが間近に見える地で、その麓に建てられたハーミテージホテルも立派だった。　ホテルの庭園には、エベレスト世界初登頂をなし遂げたヒラリー卿の像が、マウントクックを眺めるように立っていた。

ヒラリー卿がニュージーランドで英雄であるのは当然であるが、当時、存命中であるにもかかわらず、すでに５ドルの紙幣になっていた。笑顔の横顔をデザインしたものだった。北島のオークランドを旅行した時、「彼が今なお健在であること」や「バスが彼の家の近くを通っている」など日本人バスガイドから知らされたが、帰国３年後の２００８年１月、彼の死を、新聞記事で知った。享年８８だった。

さて、話を戻すが、私達夫婦はそのヒラリー卿の銅像が立つ庭園を散歩していた時、品のいいアメリカ人老夫婦に会った。しばらくして、ご主人が夫人をヒラリー像の前に立たせ写真を撮ろうとしてるのを見て、家内が「一緒に撮ってあげましょうか」と声を掛けた。そんなことから、その夫婦と会話が始まった。クライストチャーチで英語を勉強していると言うと、『何故、勉強をしているのか』と聞かれて『外国人と色々な問題で話したいから』と答えた。その時、語学学校でのインドネシア人青年との会話（南京事件）や日記に書いた真珠湾攻撃のことなど次々思い出され、思わず「パール・ハーバー　I'm　sorry」の言葉が口をついて出た。１か月前の日記から始まった第 2 次世界大戦に関わる日本が起こした戦争とアジアの留学生達のことが頭をよぎったからだ。その時、老夫婦はこう言ったのだ。

「ヒロシマ、ナガサキ　I'm sorry 」

その時の二人のこの言葉を今でも忘れらない。
帰国後、この話を日本人に話すとき、涙が出そうになる。

南京事件も真珠湾攻撃も、長崎・広島の原爆も我々の一世代前の人間のやったことだ。しかし、歴史的なこれらの重大な過ちが外ならぬ同胞によってもたらされたことに、等しく痛みを感じている人が、アメリカ人の中にもいることを知ったからた。

出会い編（４）
「日本女性は整形している人が多い」って本当ですか？

韓国人や台湾人の中で日本に対する関心が思いの外強いと感じることが何度かあった。簡単な日本語を覚えている人もいた。

ある時、本屋のアルバイトでお金を貯めニュージーランドに来たという台湾の女性が「この本読んだか」と言って見せてくれたのが「ノルウエイの森」（村上春樹）だった。もちろん、中国語に翻訳されていた。海外における村上春樹の人気を思わぬところで確認することになった。それ以上に印象深かったのが漢字だけの日本の小説だった。当たり前とは言え、珍しくて何度も眺め回した。

また２０代の韓国女性は反町隆史の名前を言って、彼が松島菜々子と結婚して「悔しい」と言っていた。

また、「日本ではいとこ同士が結婚できるのか」とも聞いた。韓国では禁止されているのだそうだ。

他におもしろい質問もされた。「日本の女性は整形している人が多いって本当か？」「結婚していなくとも一緒に住むのが普通だって本当か？」前者の質問には「ほんの一部の特別な人だ」と答えたが、後者については「現在ではそういう人が多くなっている。」と答えた。

帰国後、「冬ソナ」や「チェオクの剣」「チャングムの誓い」「チュモン」など、韓国ドラマを見たが、どれもきれいな男女関係が描かれていた。彼女が「噂（？）」で聞く日本の男女関係の有りように半信半疑だったのだと思う。

もっと驚いたのは香港から来ていたこれも若い女性からの質問だった。「日本の女性は、パンツをはいていないって本当か？」これにはさすがに驚いた。おそらく白木屋の火事の話を聞いて「日本の女性は・・」という作り話を半ば信じていたのかも知れない。

「日本の女性が着物を着ていた時代には、パンツをはかずに別の下着を身につけていたが、現在はそんなことはない」と答えた。すると意味ありげな笑みを浮かべながら、「女がパンツをはかいないと、男にとってグッドか？」と聞いてきたので「メイビー」と答えた。

出会い編（５）
日本語ブーム？・・バカ、アホ。

若者同士はやっぱり良いものだ。彼らは学校外でも活発に交流しあっていた。中には台湾青年と日本女性のカップルもあり、その関係からか、彼は日本語を積極的に覚えようとしていた。彼が若者同士の交流（遊び）で覚えた日本語の中には「バカ」「アホ」「チンポ」「ウンコ」「カンチョウ」「ハゲ」などがあり、これらの単語が会話の中、突然飛び出したりした。「あなたはハゲている」と言ったこともあった。親しくつきあっていたので、からかいの言葉を日本語練習のつもりで言ったのだと思う。

彼は２０代で台湾では市役所職員だったそうだ。

英語の能力が高く明るい青年だったが、少々、幼稚だった気がする。休み時間になると日本人の若者の周りに集まったタイ人や台湾人、韓国人と一緒になって「悪い日本語」を使い笑い合っていた。もちろん、日本人が教えていたのだった。

授業中、日本人の仲間が間違った答えをすると、彼は「バカ」と言ったりするので仲間同士くすくす笑ったりしていた。しかし、そんな雰囲気を嫌う日本人もいた。ニュージーランドに移民し食堂で働いていた中年男性が、教師に提出していた日記を見せてくれた。

「日本語には美しい言葉がたくさんあるのに、若い外国人が汚い言葉を使ってふざけあっている。不愉快だ」

私はその人の感じ方を十分理解しながらも、反面、言葉を覚えるって、ある意味そういうことも含まれるのではないかと思った。

初めて英語を習った中学生のとき、「バカ、デブ、ブタ」などを意識的に覚えて友達とふざけ合ったし、こっそり、キスなんていう単語も調べたりした。

彼に言った。「・・・しかし、砂金をとる時には、砂や泥も一緒にすくってしまう。同じように美しい言葉と一緒に汚い言葉も覚えているのではないか」

そして、偉そうにこうも付け加えた。「大事にしたいのは、日本語に関心を持っている外国人が積極的に日本語を覚えていることではないか」と。

良い言葉も悪い言葉も生活の中で生きていると思ったからだ。

出会い編（６）

お先に失礼します。

授業が終わって帰り際のこと。
「バカ」とか「チンポ」なんて言っていた台湾の青年が、私の方を見ながら右手を上げ「じゃあなー」と言って教室を出ようとした。
私はすかさず彼の腕をつかんだ。そして白板に「儒教」と書いてから「日本と台湾は同じ思想でしょう？」と言って白板の文字を指さした。
「そうだ」と答えたので私は言った。「もし、あなたが私と同じ年か、私よりも年上の場合は、『じゃあな』はＯＫ。しかし、あなたは私よりもずっと若い。だから『じゃなー』はＮＯと言った。
すると彼は非常に驚いて「なんと言えばいいのか」と聞いたので「お先に失礼します」と教えた。
彼は手帳をとり出してその言葉を書き込んだ。アルファベットが見えたので、多分、ローマ字で発音を書いたのではないかと思った。私としても「正しい日本語」を知ってもらいたかったのだ。　翌日、授業が終わっての帰り、誰かが私の肩をたたいた。
振り返ると台湾人の彼が笑顔を浮かべ、台湾製日本語で「お先に失礼します」と言った。私も笑って「Very Good」と言った。
前日、教わった日本語をさっそく使って見せたかったのだろう。それからしばらくして、その彼が「もし、マサ（私のこと）の娘が台湾人と結婚すると言ったら賛成するか」と聞いたので「本人がそうしたいのならば賛成する」と答えた。その後の彼の恋の行方がどうなったのか、それはわからない。
因みに、日本人の女子留学生の中にベトナム人の留学生と同棲していた人がいたし、ニュージーランド人の若者と同棲していたワーホリの日本女性もいた。日本の親は知っているのかなと思いながら見ていた。
ある時、そのニュージーランド人と同棲している女性が、彼氏と我が家に遊びに来た。話の中で日本人の女性の母親は、中学校で家庭科の教師をしているとのことだったが、娘がニュージーランド人と同棲していることは、おそらく知らないのだろうと思った。
ニュージーランド人の若者が日本に行きたいと言ったとき、女性がちょっと硬い表情をして、視線を床に落とすのを見た。
その時、その女性の心の中まで見たような気がした。

出会い編（７）
文化大革命のことを聞いてみた。

色々な国からの留学生との交流は主に昼休みに行われた。お互いいい加減な英語なのに不思議に会話が成り立っていた。英語の発音は国によって特徴があって、例えば、韓国人は、コーヒーのことを「コピー」と発音していたし、タイ人の英語はいつも、「ホワン、ホワン」と言う感じに聞こえて聞き取りにくい印象があった。それでもネイティブの早口の英語よりずっとわかりやすく感じた。一番わかりやすい英語の発音は、やっぱり、日本人だった。
学生同士の会話は、国は違っていても、お互い関心のあることを話し合うので楽しかった思い出が多い。
ある日、６０歳位の中国人男性が私のクラスに入った。私達は年が近いこともあり自然と親しくなった。私は彼に是非聞いてみたいことがあった。
ある日、漢字で「紅衛兵」と書いて示し「知ってるか？」と聞いた。彼は一瞬、驚いて「おお、知ってる知ってる」と答えた。正直なところ聞いて良いかどうか迷ってのことだったが、反応が自然で良い感じだったので、質問を続けた。「文化大革命」「毛沢東」「劉少奇」「江青」「四人組」などと次々、書いた。彼はちょっと興奮気味に「知ってる。知ってる」と何度も言った。「あなたは大丈夫だったのか？」と聞くと、「自分は工場労働者だったので大丈夫だった。しかし、教師や医者などは農村に連れて行かれ労働させられた。」と答えた。
当時、私は大学生で新聞報道で文化大革命の一部が伝えられていたが、新聞社によってその内容に違いがあった。世評、良心的と言われていた某「大新聞」は、かなり肯定的に報道していた。しかし、後日、毛沢東側から排除されていた指導者達だけでなく、多くの国民が、悲惨な状況に置かれていたことを改めて知った。だから、同じ時期に渦中にいた当事者の中国人に、それも一般国民に直接、話を聞いてみたかったのだ。
彼の家族は、文化大革命後、中国からニュージーランドに移民したのだそうだ。残念ながら、いきさつは、聞きそびれてしまった。

出会い編（８）
韓国人の「おごる文化」（？）

　ある日の授業でのこと。「過去に大事なものを盗まれたことがあるか」との教員の質問に、学生一人一人が答える場面があった。ほとんどの人が「ない」と答える中、「強盗が入ってきた時、母親がピストルを持ち出した。」と答えたタイの若者もいた。タイもアメリカと同じように､銃を自由に保持できるのかと疑問に思ったが、聞くこともなく別れてしまった。
　同じ質問に『ある』と答えた学生がもう一人いた。入学間もない５０代の韓国女性だった。彼女は、教師の質問に「盗まれたことがある」とはっきり答えた。教師から「何を」と聞かれると「マイ・ハート」と答えた。「はあー？」と思っていると、「誰に」と聞かれて「マイ・ハズバンド」と答えたのだ。冗談ぽっくでなく、真顔で答えたものだから、その時、ちょっとざわめきが起こった。
「はあ～？わけわかんない」と心の中で言ってしまった。ガラにもなく、心の中でとはいえ、つい、若者言葉を使ってしまったのだ。私には嫌いな若者言葉がいくつもある。『めっちゃ』や褒め言葉に使う意味不明な『やばい』など不快に感じる言葉が沢山あるが、「はあ～？」もその１つだった。人を小馬鹿にしたような、とぼけた物言いのする言葉。そして、その言葉のあとに、大抵「わけわかんない」と続くのだ。「マイ、ハズバンド」と答えるのを聞いた時、「はあー？わけわかんない」が、ぱっと浮かんで心の中で使ってしまったのだ。　しかし、人間、つき合ってみなければわからないものだ。この女性は頭も良く、人柄もとっても良い人だったのだ。その後、彼女の夫とも知り合いとなり夫婦共々親しくつき合うようになった。互いの家を訪問し合ったこともあった。初めて一緒に外食することになった時のことだ、韓国には「おごる文化」があると聞いていたので「必ず割り勘にする」ことを夫婦で決めていた。案の定、韓国人のご夫婦は、自分たちが支払うと言い出した。「割り勘にしよう」との私達の提案に二人が言った。　「今回、私達が払います。次にあなた達が払って下さい。そうすれば、また、会って話が出来るでしょう？」　「ははあ、そう言うことだったのか」と思った。韓国の「おごる文化」とは、単に「おごる」というのではなく「また、会いましょう」とのメッセージが含まれているようなのだ。私たちは、その韓国人夫婦の「また会ってお話をしましょう」という気持ちをうれしく受け止めて、おごってもらうことにした。　その１か月後、彼等と再び食事をすることになった。その時はベトナム料理店であったが、もちろん、今度は、私たちがおごったのだ。

出会い編（９）
思いがけずロシヤ民謡を合唱（？）

　ある日、ウクライナから移民していた５０代の女性マリアから、『遊びに来ないか』と誘われた。この女性は、カンニングや見え透いたウソを言ったりするものだから、クラスメイトから露骨に嫌われていた。
ウクライナは、古くはモンゴル帝国に滅ぼされたあと、周辺国に支配され、のちに旧ロシアやソ連の支配下に入り、ソ連崩壊まで他国の支配を受けていた国だ。しかも、ソ連時代は、チェルノブイリ原子力発電所事故まで起こされた。言うなれば、外国から踏みつけにされ続けてきた国なのだ。また、彼女は個人的にも夫を交通事故で失い、いきさつは知らないが、ニュージーランドに移民していた。
彼女の人格が、ウクライナの外国の支配とどのように関わりがあるのかは知らないが、全く無関係（飛躍している）とは言えないのではないかと思った。

彼女から声がかかったのは、私たち夫婦と、香港から来ていた２０代の女性だった。彼女の家に行くと、彼女の他にロシアで医者をしていたという７０歳くらいの女性もいた。彼女もニュージーランドに移民しているとのことだった。
マリアの家では、手作りのケーキをごちそうになりおしゃべりをしたのだが、しばらくすると、彼女はカセットテープで音楽を流した。その時の曲が、ロシア民謡の「カチューシャ」だった。
『この歌知ってるよ』と言って、歌ったところ、彼女やロシヤ人の女性は喜んで一緒に歌うことになった。
彼女らはロシア語で、私たちは日本語で歌った。そのようにして歌った歌には、『トロイカ』「モスクワ郊外に夕べ」などがあった。
実に楽しいひとときだった。
しかし、一方では、香港から来た女性は、『ロシヤ民謡」を知らず、歌えなかったので、彼女にとっては１人寂しい居場所となったに違いない。

　ロシヤ民謡が、日本に広く知れ渡ったのは、他ならぬダークダックスのお陰だ。もし、私たちが、中国（香港）や韓国の歌を知っていたら、もっと韓国人や香港人との交流が出来て親しくなり、もっと楽しいニュージーランド生活が送れたはずだ。残念でならない。

出会い編（10）
藤野先生の真似をしちゃった！

学生の中に台湾女性の仲良しコンビがいた。彼女たちは工業系の専門学校卒業後、本屋、コンビニでアルバイトをし、滞在費を貯めてニュージーランドに来ていた。二人とも非常に地味で性格的にも素直な女性で私たち夫婦と親しくなった。

ある時、「昔、日本人の中にすごく頭の良い人がいて中国語を漢字の読み順を変えて日本語として読みとる方法を考えた人がいた。」と話した。

彼女たちが興味を示したので、大昔、高校で習った漢文を思い出しながら、「温故知新」を例に返り点の話しをした。また、杜甫の詩も日本の学校で習ったと言って「国破山河在　城春草木深　感時花（濺）涙・・」と書いて見せたのだが、（濺）という漢字が書けなく空欄にしたところ、すぐさま濺を書いてくれた。

中国語の漢字の数と難解さは、日本の常用漢字の比ではない。学生時代、たまたま図書館で漢字全集を見たときその多さと難解さにどぎもを抜かれた。数にして常用漢字のなん十倍もあると思った。難解な漢字をたくさん考案し読み書きする中国人って頭が良いなと思った。　もし、自分が中国や台湾に生まれていたらどうなっていただろう。少なくとも、いま、読み書きしている日本語のようなわけにはいかなかったのではないかと思った。

彼女たちが留学を終え台湾に帰る時、私たち夫婦と４人で記念写真を撮った。

私はその写真の裏に「惜別」と書き、その横に小さく「再見」（中国語のさようなら）と付け加えた。魯迅の小説「藤野先生」の真似をしたのだ。

東北大学の藤野先生が、留学生の魯迅との別れの際、二人で写した写真の裏に「惜別」と書いて渡した実話が小説になっていた。

彼女達は小説「藤野先生」を知らなかったし、「惜別」が中国語でどんな意味になるのかわからなかったが、私たちの気持ちは十分に伝わったように思った。

彼女たちは魯迅を「るうしゅん」と発音していた。

出会い編（11）

中学の先生に一杯食わされた？

ニュージーランドでも囲碁を楽しみたいと思い、出発前、日本棋院に問い合わせた。
その結果、クライストチャーチには支部はないが囲碁をする日本人がいることを知った。棋院の仲立ちでさっそく連絡をとった。
　その方は読売新聞社を退職されご夫婦で永住権をとりクライストチャーチに住んでいた。
クライストチャーチには囲碁同好会があり週１回例会を持っていた。
ニュージーランド到着後、早々に例会に参加したが、滞在中は近所に住む大学の先生が送迎してくれた。その方は６０歳前後で立派な体格とひげの持ち主だった。
碁会所は倉庫の一角で毎回１０人前後が参加していた。半分は２～３０代でニュージーランド人、中国人、韓国人、それにドイツ人の女子留学生もいた。日本人は私を入れて二人だった。
ある時、その先生を我が家に招き囲碁をした。
対戦のさ中、突然、「ブー」と音がした。屁（へ）をたれたのだ。恐縮したのは客ではなく私だった。恐る恐る上目遣いで拝顔したところ平然と次の一手を考えていた。

　昔、中学の先生が言った。欧米ではゲップは非常に恥ずかしいことだが、屁は全く恥ずかしくない。
若い女性でも所構わずブーブーする。純情多感な中学生の私にはいささかショックな話だったが、そう言うものかと聞いていた。
この際、真偽を確かめることにした。語学学校の女教師２人に「恥ずかしくないのか」と聞いてみた。
若い女教師はそうした時に浮かべる日本人と同じ表情をしながら「年寄りの男だから」と答えた。中年の女教師は「驚いたポーズをしながら何が起こったんだ？と言えば良かったのに」と笑いながら言った。
とっくに忘れていた５０年前のちっちゃなトゲがこの時とれた。彼らは「異人」ではなかったのだ。
どうやら中学の先生に一杯食わされたようだ。その時の対局写真は我が家の居間に飾ってある。

国・気質編（１）
世界初の女性参政権

ニュージーランド行きを決めた時、下調べをした。
人口や国土面積、歴史、少数民族マオリのことなどだ。　ところが、思いがけない事実を知り驚いた。
ニュージーランドは世界で初めて女性参政権を確立（１８９３年）した国だったのだ。
当時、ニュージーランドはまだ英国の植民地だった。それにもかかわらず英国より３５年も早く女性参政権が認められたのだ。信じ難いことだった。果たしてその頃、何があったのか。英国の介入の有無。この運動の指導者達のこと。聞いてみたいことが山ほどあった。しかし、英語力不足のため十分聞き出すことが出来なかった。
ただ、紙に書いて説明してくれた文章で acknowledgy「（渋々）認める」という単語が印象に残った。
クライストチャーチ中心部のエイボン川周辺の公園に大きなパネル状のブロンズ像がある。そこに指導者ケイト-シェパード女史を囲んだ女性達が胸を張り正面を向いて立っている。
このブロンズと初めて対面した時、偉大な歴史の１ページを切り拓いた彼女達の姿に感動した。
因みに、ケイト-シェパードはニュージーランドの１０ドル紙幣になっている。
帰国後、ニュージーランドを紹介する番組を何度か見た。しかし、このブロンズ像を放映する番組は一つもなかった。
旅行ガイドブックの扱いも同様だった。
この歴史的事実を紹介すれば、ニュージーランドに対する認識も一層深まるのにと思った。
ディレクターも編集長も視聴者、観光客は風景と食事にしか興味がないと思いこんでいるのかも知れない。ちなみに、旧ソ連の女性参政権は１９１７年、中国は１９４９年に認められた。いずれも革命の起こった年だ。しかし、これらの国の権力者は女性参政権が、自由と民主主義のもとでしか花開かないことを知らなかったようだ。言論が弾圧され民主的選挙が許されない体制下では女性参政権は「造花」にすぎない。

国・気質編（２）
あっぱれ！バスの運転手。

ニュージーランドで日本では見たことのない光景を目にした。
一つは乗客のほとんど全員が「サンキュー」と言ってバスを降り、運転手は「どう致しまして」と応える事だ。
ニュージーランドではごく当たり前の光景だが、お客が「神様」である日本人からすれば逆の現象に思える。
「我が社のバスをご利用いただき感謝する」式の教育と強制が行われていないと思った。
しかし、乗客も運転手も無言ではなく先の自然な挨拶を交わしていた。
これは日本におけるバスツアー旅行で、乗客がガイドや運転手にかけるねぎらいの言葉と似ていた。まことにさわやかな光景だった。
二つ目は乳母車利用者への対応だ。バスの中には乳母車専用のスペース（必要に応じて座席を折りたたみ、空間を作る）が設けられていた。運転手はバス停に乳母車利用客を見かけるとわざわざバスから降りて乳母車を車内まで運ぶのだ。そして、その専用スペースに座っている乗客に立つことを要求する。それも堂々としていて恐縮も愛想笑いもせず客に席を立たせる。
専用スペースが先客で埋まっている時は、乳母車をバス前面のフックにぶら下げて走る。その作業の全てを運転手がするのだ。只々「あっぱれ」と言うほかない。　三つ目はバス内での飲食が禁止されていた。時々、飲み物を口にしながら乗車しようとする客に運転手は捨てるよう要求する。車内でも同様だった。運転手は毅然として率直明快な要求だったが傲慢さは感じられなかった。ニュージーランドではお客は「神様」ではなかったのだ。
ＮＺのバスは福祉用車両（？）になっていて、お年寄りや身体不自由な人には車高を下げ乗降を助けていた。運転手はこうした人たちが完全に着席するまでバスを動かさずこの点も徹底していた。
バス運転手の客への対応の全てに日本と違った社員教育の観点を感じた。

国・気質編（３）
日本の中古車がいっぱい！

ニュージーランド滞在の体験を、地元の新聞社に書いたことがあった。そのお陰で知人が出来た。その方は２年７か月ニュージーランドに滞在した方の体験を伺った。

一つはＮＺ人に車を牽引してもらったときの話。

カーブと坂の多い道を時速８０キロ（最高時）で引かれとても怖かったこと。

二つ目はバスでの体験。

後部座席の乗客から「今、時速何キロ？」と聞かれた運転手が「ゼロ」と答えた。驚いてスピードメーターを見ると針は確かにゼロを指していた。速度メーターが壊れていたのだ。

ニュージーランドで走っている車は、ほとんどが日本の中古車だ。それもかなり古いものが多い。

日本からの友人とバスでアーサーズパス（サザンアルプスの峠にある）まで行った時のこと。

急斜面を登るときの不気味なエンジン音。エンストした上にブレーキがきかず逆走したらどうしようと心配した。道中、２台のバスがエンストを起こし乗客は他の車に乗り換えていた。

後日、私たち夫婦もエンストのため他のバスに乗り換えたことがあった。バスのドアには日本語で「自動扉」と書かれていたし、ある時は「バックします。ご注意下さい」と日本語が聞こえたので家の窓から見ると日本車だった。どうやら輸入車をそのまま使用しているらしい。

先のＮＺ滞在者から別な話も聞いた。

彼が鍵をつけたままドアをロックしてしまった時のこと。

手助けしてくれたＮＺ人は鍵３０個近くついた束を持ってきて一つ一つ試したそうだ。

丁度そのとき、釣り帰りの若者が手伝ってくれたのだが、驚いたことにその青年も同じような鍵束を持っていたというのだ。

しかし、どの鍵も合わず最後は別な方法でドアを開けたそうだ。それにしても彼らはなぜそんなにたくさん鍵を持っていたのだろう。しかも、親切心とは言え、白昼堂々、人前で鍵を試しているのだから誠に不可解な話だ。

国・気質編（４）
受領印のいらない国。

ニュージーランドに行って１か月ほど経ったある朝、隣人の日本人女性から電話があった。
「玄関にお宅の荷物が届いている。」とのこと。郵便配達員が間違って置いていったのだ。
ニュージーランドでは受領印を取らずに荷物を玄関に置いていくのが普通だという。しかも「紛失はあまりないみたいだ」との話。
しばらくして第２便が届いたときも同様だった。さすがに３度あってはと、近くの郵便局に行き我が家の場所を図に書き正確な配達をお願いした。　担当者はにっこり笑って親指を立て「ＯＫ」と応えた。ああ、感じがいいと思った。以後、荷物はお願いしたとおり正確に届いた。

受領印が不要なため幸いしたこともあった。
ある時、日本の友人が番地を書き違えて荷物を送ってくれたことがあった。早速、その番地の家を訪ねたところ、玄関に我が家への荷物が無造作に置かれていた。
その家の人の話では、間違って届いたが、いずれ本人が取りに来ると思っていたとのこと。荷物は無傷で約１週間おかれていたのだ。
日本でなら間違いなく本国に送り返されていたはずだ。受取人がいないのだから当然である。
しかし、ニュージーランド人にはこの感覚が希薄なように思う。これは「おおらか」とは違う気がする。
移民したある日本人が「月刊ニュージー」（ニュージーランドの日本語情報誌）に体験談を書いている。春に大型の本棚を注文した。しかし、年の瀬にも出来上がらず何回か催促したがラチがあかない。結局、１４か月後に解約したという。
また、ある時は革張りのソファーを注文したがいっこうに入荷せずあきらめた。実はこうした話はニュージーランドではよく聞く話なのだ。
どうも「受領印を取らずに荷物を玄関に置いていく」ことと、こうした生活スタイルとは無関係ではないように思うのだがどうだろうか。

国・気質編（５）
気軽に行ける格安な演奏会

　自宅から徒歩で２０分くらいの所に「シティホール」があった。そこでは、毎日、音楽関係の催し物をやっていた。ニュージーランド滞在中、何度か演奏会に行った。ホールは、大きくて実にきれいで音響効果もすばらしいところだった。札幌市の「かでる２．７」よりも、ずっと大きい所だった。
　催し物の魅力の一つは、入場料がかなり格安（学割で２０パーセントオフ）だったことだ。　例えばクライストチャーチ交響楽団による「グリークのピアノ協奏曲」は、約９００円。「オルガンコンサート」は約１０００円。「椿姫（オペラ）」は約２，５００円）、「クラッシックバレー」は約２，２００円。「ウイーン少年合唱団」が約４６００円だった。
　それに、当時、建築１０１年のカトリック教会で行われた混声合唱は、約１８００円だった。そのようにして格安の演奏会を楽しんだニュージーランド生活だった。
それと、演奏会での初体験は、スタンディングオーベイションだった。合唱の時、特に素晴らしかった曲目の時には、聴衆の中から自然にスタンディングオーベイションが起こった。私たちも真似をして立ち上がり一生懸命拍手をした。これも、へその曲がった言い方だが、誰かが１人、スタンディングオーベイションすれば、周りの者も、付き合い（？）で立ち上がることもあるのではないかと思ったりしたが、それは確かめてはいない。
　ニュージーランドでは料金も安く、演奏会場が近かったので、日本にいる時よりも遙かに、演奏会には行きやすかった。それで、演目をいつも注目していた。
ただ意外だったのは、何事につけ、「ニュージーランド時間」と言われ「ルーズ」さが国民性のように言われる国柄だったが、演奏会は定刻通りに始まっていた。
　因みに、演奏会は格安のだったが、医療費のうち歯科は保険対象外だたので、虫歯の穴を詰めてもらっただけで１万２千円も支払った。その歯は１か月でとれてしまったので、日本に帰ってから治療し直すことになった。

国・気質編（６）
ホームパーティに招かれる。

ニュージーランドのクリスマスは夏だ。
雪がないからサンタクロースは橇（そり）では来ないと思っていた。そこで、ニュージーランド人に聞いてみた。サンタクロースは赤い服を着てトナカイの橇に乗って空から飛んで来るという。どうも、ここでも、サンタークロースと橇（そり）は、ワンセットだったのだ。北半球と南球のクリスマスの形はと全く同じだった。
ホームパーティや家族団らんが、ＮＺ流のクリスマスの過ごし方だと聞いた。ホームパーティってどんなことするのだろう。そう思っていた矢先、語学学校の先生から招待を受けた。
先生のご主人（大学の先生）と浪人生の息子さん、中学生の娘さん、それに９０歳のおばあさんと親戚の方々数人。そして私たち夫婦のほか８人の学生がいた。
パーティが始まると全員リビングに集まり、ご主人のお祈りに合わせ手を組みこうべを垂れた。
クリスチャンでなかったのは日本人だけだったが、輪の中で一緒に「アーメン」と言った。さすが日本人だ。宗教は本当のところ気にしていない。何でも丸飲みできると思った。
パーティは立食形式。テーブルには手作りの料理とデザート、ワインが並んだ。
それぞれの談笑の中、私は電子辞書を片手にサムライ政府の時代、宣教師が日本に来てキリスト教を布教させたが弾圧された話をした。そして、弾圧によって信仰を捨てた宣教師のことを小説に書いた作家がいると言った。
それを聞いたご主人は目を大きく見開いたあと、書斎から１冊の本を持ってきた。
Silence（沈黙）・Shusaku Endo（遠藤周作）とあった。
「沈黙」が、ＮＺでも読まれていたのだ。驚きとうれしさでいっぱいになった。私はさっそく作品の感想や意見を求めようとした。
「ユダは永遠に許されないのか。」「キリストは何故ユダの裏切りを未然に防げなかったのか」等々たくさん。
しかし、英語力不足のため会話は成り立たなかった。しかし、思えばこの質問。残念というより非礼この上ないことだった。せっかくクリスマスに招待して頂いたのに、こんな議論を持ち込むなんてと思った。
外国では政治や宗教の話には、特に慎重さが求められることを忘れていた。

国・気質編（７）
バス停に名前がない。

　ニュージーランドに行って間もなく「なぜ？」と思う事が多々あった。その一つがバス停に名前のないことだった。
　バスに乗った時、降りる場所に近づいているかどうかは、外の景色を確かめながら判断しなければならない。乗り過ごしては大変と緊張する。行き先が初めての時は路線図を眺めながら見当つけて降りなければならない。
知人を初めて訪問した時のことだ。運転手に「〇〇通り」を聞いて降りるよう言われ下車したが、そこは違う停留所だった。それからが大変だった。近くの店で電話を借り訪問相手と連絡をとったが、自分の降りた場所がわからない。周辺の建物や風景をいろいろ説明してやっと迎えに来てもらった。
　クライストチャーチは３７万都市。観光客や留学生、移民が多くいる街だ。
　バスを利用する外国人は皆不便を感じているに違いない。
　そう言えば、ＮＺのバス停にはボタンを押すと待ち時間が表示される便利なシステムがあった。こうしたシステムが導入されているこの国でバス停に名前も番号もついていないことが不思議だった。これは、ニュージーランド人の「ゆっくりズム」と「小さな事はあまり気にしない国民性（？）」によるためではないかと思った。
　ある時、バスが停留所を１０ｍほど行き過ぎて止まったことがあった。するとバスを待っていた人たちが笑いながらダッシュで駆け込んで来た。ニュージーランド人らしさを再確認する光景だった。
　帰国までに「バス停に番号をつけてはどうか」と提案するつもりだった。しかし、「そのうちに」と思っている間に忘れて帰って来てしまった。
　もし提案していたらどうなっていただろうか。
　「外国人から言われる筋合いはない」などと言って拒否する姿はニュージーランド人からは想像できない。
　きっと、にっこり笑って親指を立てＯＫと言ってくれたに違いない。
　ただ、いつ実行されるかどうかは、わからないけど。

国・気質編（８）

農業国って豊かなの？

　ニュージーランドのゴミ収集車は相当デカイ。長さも高さも日本の比ではなく容量にして３倍以上はあると思う。構造もかなり違う。進行方向の左側全体が大きく開かれゴミの種類に合わせた投入口がある。
　クライストチャーチでは燃えるゴミ、燃えないゴミ、生ゴミの全てを同じ日に出す。その為、種類別投入口を備えた収集車が必要なのだ。
　ゴミは自宅近くの道路（歩道側）に出すことになっている。
車は道路沿いをゆっくり走り続ける。作業員も走りながらゴミを集め所定の投入口に放り込む。その間、車は停止することはない。従って、２～３人の作業員はいつもマラソン状態なのだ。
驚いたことに、この作業に従事していたのは黒人系と褐色系の人たちだった。
　ニュージーランドでは毎年、多数の移民を受け入れている。いわゆる３Ｋ（きつい、汚い、危険）と言われる仕事はこうした人達が引き受けているのだ。
　クライストチャーチの中心街の印象では、クリスマスや祝日はもちろん、日曜日に仕事をしているニュージーランド人をあまり見かけない。働いているのは日本人や韓国人、中国人などの有色人種だ。夜中でも働かねばならないハイヤーの運転手は、アフガニスタンやスリランカ、アフリカ系の人達だ。何度か利用したタクシーでその事実を知った。彼らは働くために移民していたのだ。そして、ニュージーランド人のすき間を埋める労働に従事していた。そのせいか、ニュージーランド人の生活は時間的にも余裕があって「豊か」な感じがした。ギスギス働かずに生活を楽しんでいる印象だった。
　農業国ってこんな感じなのかなとも思った。輸出品は酪農製品、食肉、林産物。輸入品は自動車、機械類、電気機器などだ。一人あたりのＧＤＰ世界順位（ＩＭＦ・２００８年）は２８位、日本は２３位。　日本国民の多くが命を削って働いていても、ＮＺとほとんど変わらないのかと思った。
　日本のＧＤＰ２位とは、人口が（多いので）順位を押し上げていたのだ。

国・気質編（９）

やめてー！　お願い！

ニュージーランド人はとても感じが良く親切だったし、とりわけ性格的に穏やかな国民という印象だった。
　しかし、その温厚なニュージーランド人が車のハンドルを握ったとたん豹変するのだ。ニュージーランド人ドライバーによる恐怖の体験談は後を絶たない。それはバスの運転手とて例外ではなかった。
　ミルフォードサウンドまでの道中には急カーブや崖、その下に湖があるが柵はない。そうした危険箇所にも拘わらずバスは猛スピードで走る。だから帰りは往復料金を払っているのに高額の飛行機で帰ってくる乗客が少なくない。これは、誇張ではなく、本当の話だ。
　高速道路ではないから自転車は走っているしカーブの陰に人がいたりする。当然、対向車もある。そんな中の爆走だ。直線はもちろん緩やかなカーブなら制限速度いっぱいの１００キロで飛ばす。
　しかも、運転しながら携帯電話はするし、ハンドルの上で運行表の記録をする。
　一番不安を感じたのは、時々、後ろを向いて客と話ながら運転することだ。
　彼らは相手の目をしっかり見て話をするせいか、後ろを向いている時間が長い。しかも時々笑っている。
「やめてー！お願い！」と叫びたくなる。
　ビデオ撮影のため前に座ったことが災いした。スピードメーターや運転手のすることがよく見えるのだ。そのせいで恐怖を感じてしまう。後ろの席で居眠りでもしていれば良かったのに。ここはバンジージャンプの国、ニュージーランドだったのだ。
　この国での命乞いは、日本の神（神道）にすればいいのか、それとも仏様にか。はたまた、キリストにすればいいのか。
そもそも無信心の私が、今さら神頼みしても始まらない。
　こんな時は運転手を信じ頼るしかない。彼だって命は惜しいだろう。しかも、プロなのだ。死ぬようなバカなことは決してしないだろう。
　ただ、ただ、それだけを信じて身をまかせていた。

国・気質編（10）

遅れているＩＴと貧弱な分電盤

入学が決まったあと、語学学校から住居に関する情報が送られてきた。金額と部屋数と地域、それにキッチンその他をシェアする等の居住形態。私たちは完全に独立した２ＬＤＫを希望した。そうした中、オーナーの中に日本人の熟年者の夫婦を希望している人がいることを知った。オーナーの希望と私たちが示した住宅の条件が合致し入居先が決まった。家賃は学校を経由しての交渉の結果、週２５０ドルとなった。欧米は週単位の契約となるので、日本的な感覚で言えば、家賃は月１０００ドル。日本円にして当時のレートで約８万円だった。１年間契約した関係でかなり割安にしてくれた。近所にいた日本人の家賃は、週３００ドルで私たちが入居した家よりも狭く、きれいではなかった。
家は、２階構造になっていて、１階は駐車場、給湯・洗濯施設。
裏庭には、もの干し、芝生、杏の木。そして２階が住居となっていた。茶の間は２０畳くらいで、テレビ、ビデオ、ＣＤのコンポ、書籍類が置いてあった。キッチンには、調理用具、食器一式が用意されていたほか、ディスポーザーもついていた。のちに知ったのだが、ザル１つでも不足があれば、オーナーに要求するものなのだそうだ。壁には、クリムトの絵が飾ってあった。茶の間は４つの壁面のうち、３面が床までガラスだったので、幾分危険に思った。他に寝室と客用の部屋があったが、それぞれ１０畳くらいだったと思う。
インターネットは、電話回線と共用の為、電話使用中はインターネットは出来なかった。だから、囲碁の友人とのメールの時は、しばしば、長電話に邪魔された。ニュージーランド第３の都市、３８万人のクライストチャーチでさえ、インターネット事情はかなり不便だと思った。当時、日本ではＡＤＳＬが一般的で、光回線もかなり浸透していた。それなのにＩＳＤＮにもなっていないインターネット状況に、かなりの「遅れ」を感じた。また、部屋ごとについているコンセントに、別々に電気ストーブを付けたところヒューズが飛んだ。トータルのワット数以下なのに、不思議に思って調べてみた。まず分電盤を見て驚いた。約５０年前、私が小中学生の頃に使っていた陶器のヒューズボックスだったからだ。おまけにブレーカーはついていない。それに２つの部屋の電流が、１つのヒューズにつながっていた。結局、電気屋から糸ヒューズを買ってつけ換えることになった。オール電化されているニュージーランドの電気事情は、ＩＴ同様、日本に比べかなり貧弱だと思った。

国・気質編（11）

病院にレントゲン施設がない！

ニュージーランドでの生活が１０か月目に入ろうかという頃、私の背骨が少し痛み左手の指先がしびれるようになった。なにぶん外国でのことであり、至急、医者に診てもらうことにした。ＪＴＣ（日本人をお世話する団体）の医療通訳に連絡すると、「ニュージーランドのシステムでは、いきなり専門医にかかることは出来ない。最初は家庭医にかかり容態によって治療の方針が決まる。大抵の場合は１、２か月、家庭医の治療を受け改善が見られない時に専門医に回される。」とのことだった。

何はともあれ、この国のシステムに従って予約を取ってもらい翌日受診した。

家庭医のオフィスはクライストチャーチのど真ん中にあるメディカルセンターの２階にあった。この立派な施設に何人の家庭医がいるのかわからなかったが、カウンターには３人の受付嬢がいた。

医者は私の背骨を押して「痛いか？」と聞いた。「痛い」と言うと何やら考えている風であったが、医療通訳に言ったのは「同じこの建物にマッサージをする人がいる。」との話だった。

私としては、いささか腑に落ちず「レントゲン写真をとって欲しい」とお願いした。日本でぎっくり腰をしたときの知識で「痛み」よりも「しびれ」の方が「より心配」だったのでしっかり見て欲しかったのだ。

医者は快諾してくれたが、驚いたことにその病院にはレントゲン施設がなかったのだ。

診察が終わって気づいたのだが、医務室には、医者と患者の椅子とベットが一つあるだけで看護師は見あたらなかった。その日はレントゲン施設のある病院（救急病院）の予約を取ってもらい翌日行くことにした。

私が小学校に入学する前だから、６０年以上もの昔の話。どんな小さな個人病院でもレントゲン写真を撮ってもらった記憶があった。もちろん日本でのこと。

近代国家ニュージーランドの３７万都市でレントゲン施設を持たない病院が存在することは予想外だった。

国・気質編（12）

ええ！マッサージですか？

予約当日、レントゲン施設のある救急病院には一人で行った。待合室には腕を包帯でつった小学生の子供と母親がいた。母親の話では「転んで腕を折ったらしい」ので家庭医に行ったところ「レントゲンを撮って来るように」言われ車で来たとのこと。X 線撮影後、再び家庭医に行くのだと言っていた。正直びっくりした。どこの家庭医か聞かなかったけれど、そこでもレントゲン設備がなかったということだ。　ニュージーランドでは、家庭医の病院にはレントゲン施設のないのが一般的なのかも知れないと思った。

命に別状はないとはいえ、手をつり上げたままいる子供が痛々しく思った。雑談の中で母親が中国人で夫がＮＺ人であることがわかった。間もなくして私の番となり、X 線の平面写真を撮ったのだが、X線写真はインターネットで家庭医に送るとのことで、私が直接、持って行かなくとも良いと言われた。

数日後、やはり予約を取って通訳と一緒に家庭医の所を訪れた。

医者はパソコンの画面に向かいながら説明した。通訳によれば「専門医の所見では背骨に異常がない。しばらくマッサージをしてみてはどうか？」と言い、「もし、希望するならば予約していくように」とのことだった。

「ええー！マッサージですか？」私は急に不安を覚えた。このままＮＺにいて大丈夫かなと思った。とにかく、マッサージは断り帰宅した。

帰国後、さっそく整形外科をたずねた。「どうしたのか」と受付の看護師に聞かれ「指がしびれる」と言うと、「首のレントゲンを撮ってきて下さい」と言われた。いきなり、受付看護師から首のＸ写真と言われたのには、正直驚いた。Ｘ線写真を見た医者は「頸椎ヘルニアですね」と言った。以前、足がしびれるときは手術が必要な場合があると聞いていたので恐る恐る聞いてみると「その必要がない」とのことだった。

帰宅後、さっそく、頸椎ヘルニアについて調べてみた。症状がぴったりだった。その後、完治したが「手先がしびれたら頸椎を調べろ」は、医学の基本なのかと思った。

誠に僭越ながらニュージーランドの医者に教えてやりたいと思った。

国・気質編（13）

あちらのホームステイは完全なビジネス？

学校には、毎日弁当を持って行った。もちろん､米の弁当だ。日本人の学生たちは、次々のぞき込んでは、うらやましがった。
先生も珍しそうに眺めていたが、何人かの先生は､『誰が作ったのか』と聞き、決まって『マサ（私のこと）は、作らないのか』と聞いた。そして、これまた決まって、直接私に『どうしてマサは作らないのか』と聞いてくる。はなはだ、迷惑な話だった。覚えたばかりの「Mind your business ！」（余計なお世話だ』と言ってやりたかったが、そうも言えず、都度、適当に答えるか、日本流で笑ってごまかした。
日本人に限らず、多くの学生は、ホームステイをしていた。そのうち、日本人からホームステイ先の事情が色々伝わってきた。
極端な例かも知れないが､『遅くまで起きていては困る。電気を使い過ぎる』と言われたとか､「シャワーは、短時間にしてくれ」など。ニュージーランドは、オール電化の国だから、シャワーのお湯は、夜中に電気で温めタンクに貯めているので、使用量に限りがある。ガスで暖めながら、その都度使うのとは、かなり事情が違うのだ。ほかには､『子どもが部屋に入ってきて、物をいじったので注意をしたら、子どもが泣いて、それでホームステイのマザーが怒って抗議された』例など。また、昼の弁当も、インスタントラーメンを一個だけとか、総じて、貧しそうな昼食だった。また、共通していたのは、ホームステイをすることで、日常的に会話力をつけるというのは、あまり当てに出来ないようだった。要するに、日本人がイメージしているホームステイとはかなり違うようなのだ。
ロンドンの語学学校に留学しホームステイをしていた数人の日本人学生もホームステイの家族と会話を交わすのは、ほんの少しで挨拶ぐらいだという人もいた。これは、ニュージーランドから帰国して６年後に、ロンドンに２か月間滞在したとき、日本人留学生から聞いた体験談だ。

日本人が外国人をホームステイさせる場合は、基本的にサービスと気遣いにあふれている。中には色々なところに連れて行ったりしている。言わば、親切心とボランティア精神でやっていると思う。
しかし、ニュージーランドに限らず、外国の場合は、完全にビジネスとしてやっているのが圧倒的に多いというのも事実だと思う

国・気質編（14）

土足「文化」はなじめない。

ニュージーランドに行って間もなく、学校行事で農業フェスティバルを見学した。
　農業国のこうした行事は大規模で盛りだくさんだ。珍しいところでは、牧羊犬による羊の追い込み競技、馬に乗って棒状の用具（クラブ）でボールを相手ゴールに入れるポロという競技、それに羊の毛狩り競争などだ。アルパカやリャマという家畜もこのとき初めて見た。牛舎も解放され見学した。
　帰りのバス車内でのこと。一緒に行っていた語学学校の教師が、足を組み靴の底をこちらに向けて座っていた。見ると靴底に牛糞がくっついていた。「このまま、茶の間に入るのだろうか？」と思った。また、汚れた場所を歩いた時には、（糞がついていなくとも）靴を洗って部屋に入るのかどうかも聞いてみたかった。
　私たち夫婦はニュージーランドの家に住む時、３回も床を拭いてきれいにしてから入った。
　土足をしない国民は日本人だけかと思っていたが韓国も同様だった。同年代の２組の韓国人の家を訪ねたとき、両家庭とも玄関に履き替え用のスリッパが置かれていた。
　帰国後のある年の正月、汽車の中でスウエーデン人に会った。彼の話ではスウエーデンやデンマークでは土足はしないが、オランダや英国は土足だという。ヨーロッパでも土足をする国としない国があると言うのだ。なぜ、そうした違いが生じたのか、文化史研究のテーマになるかも知れないと思った。
ニュージーランドではクリスマスに招いていただいたお宅やニュージーランド人の囲碁友達のお宅でも、じゅうたん敷きの廊下や茶の間を土足で上がり半日過ごした。どこかに違和感があり落ち着かなかった。
　日本人の習慣（情報）が行き渡っているせいか、我が家を訪れた友達や家主、個人レッスンの先生は自分から靴を脱いで入ってくれた。「土足文化」のニュージーランド人と日本人とでは「清潔」感覚が根本的に違う。その後、様々な場面でこのことを実感することになる。

国・気質編（15）

異文化は頑固だ。

土足で部屋に入る事を単にそれだけの事と思っていた。しかし、本質的にかなり違っていると思った。
語学学校でのこと。ある女教師は廊下にあったソファーになんのためらいもなく土足のまま上がり地図の説明をした。
また、男性教師は行事の会場設営の際、食堂のテーブルの上に土足のまま上がり飾りつけをした。この時も何らの躊躇もなかった。
テーブルは､私たち学生が昼食のため毎日使っているものだった。
ある時、何人かの先生に「靴を脱いで部屋に入る習慣」に関して感想を聞いた。異口同音に「清潔で良い」と答えた。
しかし、それは「良いことは取り入れる」という意味ではなかった。他国の習慣を尊重して一応、「良いことだ」と言ったにすぎないと思った。インド人は箸やスプーンを使わずに直接、手で食事をするという。箸やスプーンが衛生的だとわかっていても、やはり今もって同じ習慣を続けている。
改めて思った。異文化は「衛生的に良い」くらいの理由ではそう簡単には変わるものではないということだ。異文化は相当に「頑固」なもののようだ。
「文化」とは「行動様式、生活様式の総体」と辞書にはあるが、「衛生感覚」そのものも、まさしく「文化」なのだ。家内の目撃証言によれば、若い女教師がハンガーに吊した洋服をそのままトイレの床にベタッと置いて着替えをしていたという。この「感覚の違い」そのものが「異文化」なのだ。帰国の前日、部屋の点検に来た大家さんは、その日、土足のまま部屋に入って来た。それまでは必ず靴を脱いで入ってくれていたのに、退去の前日からニュージーランド流に変わったのだ。これは強く印象に残る「事件」だった。外国人である日本人が、床をふき土足をしないで住んでいるその真っ只中に、いわば平然と土足で部屋に入って来たのだ。
ニュージーランドにおける最後の「異文化」体験だった。